

アカメが斬る！に来た

犬大好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

優斗「そろそろ終わりにしてくれ」

一応完結

# 目次

第三話	第二話	第一話
43	20	1



## 第一話

優菜「もうわかってるよ、来たんでしょ新しいとこ」

神様「よくわかったの、今回はアカメが斬るじゃ」

優菜「人を殺せつてのか？」

悠「殺すのか・・・」

神様「どうするかは好きにするといい」

優菜「じゃあどうする？」

悠「とりあえず・・・この町がどういふところか知らないとな」

ちよつと調べた結果、ここは帝都という所らしい・・・だが

優菜「まさか、金がないなんて・・・」

悠「あのクソじじい・・・」

男の子「まあいいや今日は野宿、どこだつて寝られるぜイ」

優菜「ん？誰だ？」

男の子「ん？あんたらこそ誰だ？」

優菜「路頭に迷つてる旅人です」

男の子「俺もさつき、胸がボインの姉ちゃんに詐欺られて一文無しになっちまったんだ」

優菜「ボインて・・・どういう状況よ」

男の子「あ！変な意味はねえぞ！」

悠「まあ、俺たちも一文無しだけどな」

ガラガラガラ

女の子「止めてっ！」

パカッ

女の子「泊まるアテ無いのかなあの人達・・・気の毒に・・・」

付き添いの兵？「またですかお嬢様!？」

女の子「仕方ないでしょ性分なんだから」

近づいてくる

女の子「地方から来たんですか？」

男の子「あ・・・？ああ・・・」

優菜「そつちの子とは今会ったばかりだが、私達もそうだ」

女の子「もし泊まるアテがないんだったら私の家へ来ない？」

男の子「俺金持ってないぞ」

女の子「持ってたらこんな所で寝ないわね」

兵士1「マリアお嬢様はお前達のような奴を放っておけないんだ!」

兵士2「お言葉に甘えておけよ」

マリア「どうする?」

男の子「・・・まあ、野宿するよりやいはいけどよ・・・」

マリア「貴方達はどうぞr」

優菜「行かせていただきます」

悠「よろしくお願いします」

マリア「じゃあ決まりね♡」

でっかい家に来た

おじさん「おおっマリアがまた連れて来たぞ」

お婆さん「クセよねえこれで何人目かしら」

後ろにいる二人のオッサン・強いな

男の子「拾っていただけありがとうございます!!」

マリア「いいよいいよ♡遠慮無く泊まって」

男の子「ハイ!!」

お婆さん「人助けをすればいずれ私たちにも幸せが帰ってくるものね」

マリア「お母さん！マリアはそんなつもりじゃないよ!!」

おばさん「冗談よ冗談♡」

男の子「あの・・・ついでに一つお願いしたいことがあるんですが・・・」

話を聞いた、こいつはタツミっていうらしい

俺たちの自己紹介もした

おじさん「成程軍で出世して村を救いたいか・・・」

タツミ「ハイ」

マリア「ステキな夢ね」

おじさん「・・・だがね君帝都の内部は平和だが・・・この国は三方異民族に取り囲まれている、国境での彼らとの戦いに狩り出されるかも知れないぞ？」

タツミ「覚悟は・・・しています・・・」

おじさん「成程見上げた根性だ！若者はそうでないとな」

マリア「タツミはその村から一人で来たの？」

タツミ「いえ三人です・・・実は・・・三人で村を出た後夜盗に襲われて散り散りになったんです・・・アイツ等強いんで心配はしてないですが・・・ただイエヤスって奴が凄い方向音痴なんで集合場所の帝都までたどり着けるかどうか・・・」

おじさん「よかろう！軍の知り合いに口添えをしておこう、あとその二人の搜索もな



！」

タツミ「！ありがとうございます！」

マリア「マリアの勘つて当たるんだけどねきつと近いうちに二人とも会えると思うよ」

タツミ「マリアさん・・・」

おじさん「よし・・・じゃあこの辺にしておくか・・・」

タツミ「あの・・・ここにいる間俺に手伝えることつてありますか？」

マリア「あつじやあマリアの護衛してよ他の人と一緒に！」

おじさん「それはいいガウリ君頼んだよ！」

ガウリ「・・・わかりました」

タツミ「今日は何から何までありがとうございます！」

お婆さん「助けあいよ貴方も誰かに良いことをしてね！」

タツミ「ハイッ!!」

次の日タツミ達買い物に行ったので

お婆さんと話しているとナイトレイドという富裕層をねらつてる殺し屋集団がいるらしい

特にどうつて訳でもなく夜

優菜「!?殺気!？」

悠「どうした？」

優菜「ちよつとやべえかも」

通路に出るとタツミもいた

タツミ「ナイトレイド!!」

外を見ると糸みしたいなものに乗っている五人が見えた

優菜「あいつらがそうなのね・・・」

悠「タツミ！お前は、マリア守りに行け」

優菜「アイツ等は任せろ」

タツミ「でも・・・」

優菜「アイツが死んでもいいのか！」

タツミ「・・・わかった！」

ダダダ

外を見ると兵士が三人殺されている

ガツシャーン

窓を割り外に出る

優菜「あんたらがナイトレイドか？」

女の子「・・・」

優菜「なんか喋ろよ」

女の子「お前は標的じゃない」

優菜「こつちにはやらなきやいけない理由があんのよ」

女の子「邪魔すると斬る」

優菜「とことん邪魔する」

ダッ

詰めてくる

受け止めるか・・・

!?!?なんかヤバい気がする

バツ

避けた

優菜「なんだよ・・・それ・・・まがまがしい刀だな」

ダッ

またかよ

とりあえず避けるしか・・・

あつヤバいこのままじゃ当たる

優菜「クロノス、ザ・ワールド」

ギューン

時間を止める

今のうちに殴って吹っ飛ばす

そして動き出す

グーン

ドガア

上にいる男「え!?アカメが吹っ飛んじまったぞ!」

ダアン

上から撃ってきた(あたってない)

優菜「一人一人にしようぜ、やるなら」

ザシユ

優菜「え?斬られた?」

ズズズズ

なんか模様が浮かんでくる

優菜「は?これヤバくね?」

女の子↓アカメ「油断したあんたが悪い」

ボツ

目の前に火が出てきた

アカメ「？なんだそれは？」

神様「呪いも消すし新しいペルソナ置いてくからこれでお金持たせなかったのチャラにしてちょうだい」

こういうのしてくれるから殴れないんだよなあ

火を掴む

？「今度は私が来たんだけど・・契約でしょ、さつさとするわよ面倒だし」

優菜「了解」

ガイア「私は創造の神、ガイアよ」

優菜「ガイアってゼウスのおばあちゃんじゃなかった？」

ガイア「今ゼウスがトップだからね・・世知辛い世の中よホント」

アカメ「よくわからないけど、消えたのならもう一度斬るだけ」

優菜「そもそもさ、なんでこんなことしてんの？」

アカメ「あんたに教える必要はない」

優菜「内容によつては通すが・・」

アカメ「・・あとで教える」

優菜「いやそれじゃダメだろ・・・」

アカメ「ならついて来い」

優菜「は？」

音を出さずに走っていった

優菜「どこに向かうかぐらい言えよ！」

何とか追いつく

優菜「おい・・・場所ぐらい・・・行ってくれよ・・・」ゼーはーゼーはー

タツミ「戦場でもないのに罪もない女の子を殺す気か!!」

ヒヨイ

お姉さん「待った」

アカネ「何をする」

お姉さん「まだ時間はあるだろ？この少年には借りがあるんだ、返してやろうと思っ  
てな」

タツミ「！アンタあの時のおっぱ・・・！」

優菜「言ってたやつか！」

お姉さん「そうだよ美人のお姉さんだ♡少年お前罪もない女の子を殺すなど言っ  
たが」

近くの小屋に近づくとボインもといお姉さん  
ガゴオ

ドアをけり破る

お姉さん「これを見るとそんなことが言えるかな」

中をのぞくと・・・

下半身がない死体・左目がくりぬかれている死体・頭部がない死体・右胸のない女性の死体・・・どれも弄ばれて死んだような死体ばかりが吊るされていた

お姉さん「見てみる・・・これが帝都の闇だ」

悠「うわっ・・・むごいな・・・」

優菜「お前来るの遅い」

タツミ「・・・な・・・なんだよ・・・コレ・・・!」

お姉さん「地方から来た身元不明の者たちを甘い言葉で誘い込み己の趣味である拷問にかけて死ぬまで弄ぶ、それがこの家の人間の本性だ・・・」

優菜「ヘル・・・これ確実に地獄だよな?」

ヘル「無間地獄でしょうね」

タツミ「・・・サヨ?おいサヨ・・・サヨ・・・!」

お姉さん「知り合いもいたのか・・・」

そー

ガシツ

服を掴む

優菜「こんなこととして逃げようってのは虫が良すぎるぞ」

タツミ「この家の人間がやったのか」

お姉さん「そうだ、護衛達も黙っていたので同罪だ」

マリア「う・・ウソよ！私はこんな場所があるなんて知らなかったわタツミは助けた私とコイツ等とどっちを信じるのよ!!？」

？「・・タ・タ・ツ・ミ・タツミだろオレだ・・」

タツミ「い・・イエヤス!!？」

イエヤス「俺とサヨはその女に声をかけられて・・メシを食ったら意識が遠くなつて気が付いたらここにいたんだ、そ・・その女が・・サヨをいじめ殺しやがった・・!!!う・・ううつ・・」

イエヤスの体中に黒い模様をした物が浮き上がっていた

マリア「何が悪いって言うのよ！」

腕を振りほどかれた

バツ



マリア「お前達はなんの役にも立てない地方の田舎者でしょ!?家畜と同じ!!それをどう扱おうがアタシの勝手じゃない!!だいたいその家畜のくせに髪がサラサラで生意気すぎ!!私がこんなにクセツ毛で悩んでるのに!!だから念入りに責めてあげたのよ!!むしろこんなに目をかけて貰って感謝すべきだわ!!」

ガッ

後ろから首を掴み持ち上げる

優菜「このまま少し力を込めるだけでお前の首はへし折れるんだぞ」

タツミ「待て」

優菜「そういうことか・・・わかった」

マリアをタツミの方に向ける

マリア「ぐうう」

お姉さん「まさか・・・また庇う気か?」

タツミ「いや・・・」

ズドッ

タツミ「オレが斬る」

マリア「あ」

ドサッ

ガッ

頭を掴む

優菜「まだ死ぬなよ、さつきあの世の神様に聞いたんだが・・お前は無間地獄行きだ  
とよ」

マリア「え・・」

優菜「今までしてたことを自分の身でされてこい、お前を助けようとした俺が馬鹿  
だった。アリエル、指弾」

パアン

止めを刺した

イエヤス「へへ・・さすがはタツミ・・スカツとしたぜ・・！ゴフツ」

イエヤスが吐血した

タツミ「！どうしたイエヤス！」

アカメ「ルボラ病の末期だ・・この夫人は人間薬づけにしその様子を日記に書いて  
楽しむ趣向があつた・・ソイツはもう助からない」

優菜「見せろ」

手を取りアリエルに見せる

優菜「どうだ？」

アリエル「いけます」

優菜「アムリタシヤワー、カデンツア、ディア三回」

パアア

黒い模様は消えた

イエヤス「え？治った・・・のか？」

アカメ「!?そんなはずはない！末期まで行ってしまったら絶対に治せないはずなのに・・・」

優菜「あの、右足が女の子がサヨ・・・だったよな？」

イエヤス「あ、ああどうにかできるのか？」

優菜「できない」

タツミ「そんな」

優菜「いつもなら言うところだが、さつきガイアが仲間になったからな：ヘル、サヨの魂を持ってこれるか？」

ヘル「できなくはないけど・・・結構大変なのよ探すの！」

優菜「愚痴なら後で聞くから」

行つた

ガイア「あの子の髪の毛を一本ください」

ブチツ

優菜「ごめんな、これでいいのか？」

ガイア「はい」

あむ

食った!?

優菜「え？食うの？」

ガイア「髪の毛にはDNAが刻まれてるから、死んだ後でもDNAさえとれば・・・」

イエヤス「えつと・・・どういうことだ？」

ガイア「あつ閲覧注意だから見ないほうが良いですよ」

まず骨が出て内蔵、筋肉、皮膚、髪と体が出来上がった

ガイア「後は魂を入れるだけ」

イエヤス「おええええ・・・見るんじゃないかった」

優菜「閲覧注意って言ったよな？」

ヘル「つれてきたわよ」

サヨ「えつと・・・なんでしようか・・・」

タツミ「サヨ！」

サヨ「タツミ!?!無事だったのね！」

イエヤス「俺を忘れんなよ俺を」

サヨ「はいはい、イエヤスも無事だったのね」

優菜「いいかな？」

サヨ「あつはい」

優菜「これがあんたの新しい体、新しいって言っても前と同じのはずだから、重なるように寝てみてくれ」

サヨ「こうですか？」

ピカーツ

お姉さん「何が起こってるんだ？」

サヨ「うくん」

イエヤス「もう大丈夫なのか？」

優菜「そのはずだが・・・」

ドサツ

倒れた

タツミ「おい！大丈夫かよ」

優菜「人の体を作るのは断トツで疲れた」

イエヤスとサヨは村に帰るといい行ってしまった

アカメ「行こう」

お姉さん「んーなあ、あの少年達持って帰らないか？」

アカメ「ん？」

お姉さん「アジトはいつだって人手不足だ少年は運と度胸、才能もあるんじゃないか？二人は経験とあの能力だぞ」

ずるずる

タツミ「離せ！」

優菜「ヤバッ疲労が思ったよりあるっぽい、うごけねえ」

悠「それ俺もついてかないといけないじゃないか」

連れてかれた

鎧の男「やつと戻って来たか」

男「そろそろ引き上げないとまずいぜえ」

女の子「遅い！何やってたのよ！って何よそれ」

お姉さん「仲間だ」

タツミ「はあ!？」

お姉さん「アレ？言っただけ？今日から君たちも私たちの仲間!!ナイトレイド

就職おめでどう!!」

タツミ「?・・・何でそうなるんだよ!!」

優菜「とりあえず動けそうにないから、どうにかしてくれ」

アカメ「諦めろ、レオーネは言い出したら聞かない」

お姉さん↓レオーネ「さすが親友分かってるねーブラッチコイツらよろしく」

タツミ「はなせ!俺は殺し屋になる気なんか・・・」

鎧の男↓ブラッチ?「大丈夫だ、すぐに良くなる」

タツミ「何が?てかお前らはいいいのかよ!」

優菜「いや、動けんし」

悠「こいつ、動けなかったらどっか行っても意味ないし」

タツミ「それとこれは別だろー!!!」

アカメ「作戦終了、帰還する!」

連れてかれた

## 第二話

あれから三日たった

俺たちはまだナイトレイドに正式に入っていない

どういう能力を使うのかしつこく聞かれているが・・・

シエーレ「まだ決心できてないんですか」

優菜「いや、そう簡単にできることじゃないだろ」

シエーレ「さっきタツミ君にも言いましたが、アジトの位置知ってる時点で仲間にならないと殺されますよ」

優菜「殺される気はないけど面倒ごと避けたいなく」

悠「言っちゃたら、いつでも逃げれるしカオスで」

シエーレ「カオス・・・ですか、色々種類があるみたいですが、まだ教えてくれ無いですか？」

優菜「仲間なつてからでいいか？」

シエーレ「それって帝具だったりしませんか？」

悠「帝具？」



シエーレ「ぎっくりいえば武器です、私だったらハサミ、アカメなら刀です」

優菜「ああ・・死にかけたあの刀か・・」

シエーレ「斬られたのに生きてるだけで凄いですよ」

優菜「らしいけどじっくりこねえんだよなこれが」

アカメ「会議室に來いって、ボスが」

優菜「ボス？」

シエーレ「見ればわかると思う」

会議室

ナジエンダ「成程、事情は全て把握した。タツミ・・ナイトレイドに加わる気はないか？」

タツミ「断つたらあの世行きなんだろう？」

ナジエンダ「いや、それはない・・だが帰す訳にもいかないからな、われわれの工房で作業員として働いてもらう事になる。とにかく断つても死にはせん、それを踏まえた上で・・・どうだ？」

タツミ「・・・俺は・・・帝都へ出て出世して貧困に苦しむ村を救うつもりだったんだ・・・ところが帝都まで腐りきってるじゃねえか！」

ブラート「中央が腐ってるから地方が貧乏で辛いんだよ、その腐っている根源を取っ

払いたくねえか？男として！」

ナジエンダ「ブラートは元々有能な帝国軍人だった、だが帝都の腐敗を知り我々の仲間になったんだ」

ブラート「俺達の仕事は帝都の悪人を始末することだからな、腐った連中の元で働くよりずっといい」

タツミ「でも悪い奴ボチボチ殺していったところで、世の中大きく変わらないだろう？それじゃあ辺境にある俺の村みたいな所は結局救われねえよ」

ナジエンダ「成る程、ならば余計にナイトレイドがピツタリだ」

タツミ「なんでそうなるんだ？」

ナジエンダ「帝都のはるか南に反帝国勢力である本命軍のアジトがある」

タツミ「・・・革命軍？」

ナジエンダ「初めは小さかった革命軍も今や大規模な組織に成長してきた、すると必然的に情報の収集や暗殺など、日の当たらない仕事をこなす部隊が作られた。それが我々ナイトレイド、今は帝都のダニを退治しているが、軍の決起の際は混乱に乗じて腐敗の根源である大臣を・・・この手で討つ！」

タツミ「・・・大臣を討つ・・・!?!」

ナジエンダ「それが我々の目的だ、他にもあるが今は置いておく。決起の時期につい

て詳しいことは言えんが・・・勝つ為の策は用意してある、その時が来れば確実にこの国は変わる」

タツミ「・・・その新しい国は・・・ちゃんと民にも優しいんだろうな？」

ナジエンダ「無論だ」

タツミ「成る程、スゲエ・・・じゃあ今の殺しも悪い奴を狙ってゴミ掃除してるだけで・・・いわゆる正義の殺し屋やつじゃねえか！」

プツ

アハハハハハハ

皆が笑う

タツミ「な・・・なんだよ、何が可笑しいんだよ!!」

レオーネ「タツミ、どんなお題目つけようがやつてることは殺しなんだよ」

シェーレ「そこに正義なんてあるわけないですよ」

ブラート「ここにいる全員・・・いつ報いを受けて死んでもおかしくないんだぜ？」

ナジエンダ「戦う理由は人それぞれだが皆覚悟はできてる・・・それでも意見は変わらなないか？」

タツミ「報酬はもらえるんだろうな？」

ナジエンダ「ああ、しっかり働いていけば故郷の一つは救えるだろう」

タツミ「だったらやる！俺をナイトレイド入れてくれ!!そういう大きな目的の為ならサヨもイエヤスもきつとそうしてる！」

マイン「村には大手をふって帰れなくなるかもよ?」

タツミ「いいさ、それで村の皆が幸せになるなら」

マイン「・・・フン」

ナジエンダ「決まりだな、修羅の道へようこそタツミ」

こつちを向く

ナジエンダ「次は君達だな、どうする?」

キュルキュル

ラバツク「侵入者だ！ナジエンダさん！」

ナジエンダ「人数と場所は?」

ラバツク「俺の決壊の反応からすると恐らく8人！全員アジト付近まで侵入しています！」

気を探る

確かにいる

ナジエンダ「手強いな、ここを嗅ぎつけてくるとは・・・恐らく異民族の傭兵だろう、仕方ない。緊急出動だ、是認生かして返すな」

優菜「悠、お前は残ってる。フルスロットルで行ってくる」

悠「言っても意味ねえってことかよ」

優菜「私達も、入りますよ。ナイトレイド」

ギューン

シエーレ「飛んで行った？」

レオーネ「自分で言うのもなんだけど、すごいの連れてきちゃったかも」  
マイン「喋ってないでいくわよ！」

優菜は・・・

ベキツ

首の骨を折る

横にいる奴が斬ろうとしたが避けてベジツトソードで首を切り落とす

優菜「これ以上やったら、何か大事なものを失う気がするな」

敵「う、うわー!!」

ザシュ

アカメ「最後までやれ」

優菜「・・・それはごめんね」

ゴウツ

何の音だ？

悠はとうとうと・・・

悠「じつとしてるなんて選択肢はないけどな！・・・迷ったけどな！」

？「頼むっ！見逃してくれ！俺が死んだら里が・・・！」

あっちか！！

ダダダダ

敵「ハハハ甘いな少年！一族の為死んでもらうぞ！！」

悠「イフリート！アギラオ！！」

ゴオオオオオオ

敵「ギャ・・・」

悠「大丈夫か？」

タツミ「あ・・・ああ・・・」

敵「くっそ・・・」

悠「今楽にしてやる、アリエル、指弾」

パン

ブラート「トウツ敵がこっちに逃げて来ただろ？後は俺に任せなっ！」

悠「もう終わった」

ブラート「へ？」

ゴウツ

ブラート「マインのパンプキンか、まあ終わったんなら戻るか」  
優菜へ

他の気も消えた・・・倒されたんだろう

優菜「終わったみたいだね、戻ろうか」

アカメ「ああ」

戻って夜飯

料理ができるといった瞬間、任された件

ついでにレシピ書いておこう

豚ひき肉 150g

ナス 大3〜4本

ニンニク 3片

生姜 3片

\*味噌、砂糖、みりん 大2

\*醤油 大1

\*コチュジャン（お好み）小2〜3

\*すりゴマ

大3

\*ごま油

小さじ2

ラー油や卵黄、ネギ

お好みで

1ナスは食べやすい大きさに切る

2フライパン多めに油を敷いてニンニク、生姜、ナスを炒める

3ナスが油を吸ってほしい透き通ってきたらひき肉も入れ、肉に火が通ったところ

で\*の調味料を入れて少しに詰める

4水溶き片栗粉を回し入れトロミがついたら完成

5お好みで卵黄やラー油、ネギをトッピング（今回は入れる）

ブラート「おおー！うめー!!」

ラバック「確かに少し辛いがいけるな！」

ブラート「ビールに合う！」

一気！一気！ \*一気飲みはやめましょう

俺と悠も呼ばれた

ナジエンダ「初陣ご苦労様だったな、タツミ、優菜、悠」

タツミ「あ、ああ」

優菜「楽勝でしたけどね」



悠「俺はそこまで何もしないすけどね」

ナジエンダ「だが悠の報告を聞き、不安なところもある・・・お前が生きぬく為には誰かに色々教えて貰う必要があるみたいだ、アカメと組んで勉強しろ」

タツミ「いいっ!?!」

ナジエンダ「お前達もついでに行ってこい、いいなアカメ」

アカメ「うん」

タツミ『アツサリ!?!』

ナジエンダ「足手まといになる様なら斬っていいぞ」

アカメ「うん、わかった」

タツミ『分かったのかよ!』

ナジエンダ「かわいい子に教えて貰えるなんてついてるな、殺されない様に頑張れ!」

次の日

皆「おかわり」

優菜「何杯食べるんだよ!」

悠「まあまあ」

優菜「お前は別の仕事だろ」

厨房

優菜「皿洗い頑張れよ」

悠「わかってるって」

タツミ「くそーつ殺し屋なのに来る日も来る日も炊事かよ」

アカメ「仕方ない、私はアジトでは炊事担当だから、私についてるお前も当然炊事担当になる」

と味見しながら言う

タツミ「味見や試食が無限だから炊事なんだな？」

アカメ「そんなことはない」

タツミ「説得力ねえよ」

マイン「やっぱり新入りにはその姿が一番サマになつてゐるわね」

タツミ「何イ!?!・ってアレ?皆どっか行くのか?」

マイン「ええ、依頼が来たから帝都で殺しよ」

タツミ「依頼?」

シエーレ「留守はよろしくお願いします」

タツミ「え、俺は?」

マイン「新入りアカメ留守番!大人しくきゆうりのヘタでも落としてなさい!じゃあね」

タツミ「ぐぬぬ」

アカメ「よしっじやあ次は私達も命を奪いに行こうか」

タツミ「炊事班の狩りってオチですね、分かります」

山の中

タツミ「なあ、アジトから結構離れてるけど大丈夫か？」

アカメ「山奥に行く分は問題ない」

優菜「お前大丈夫か？」

悠「あの時・・・ちゃんと・・・一緒に・・・走っておけば・・・」ゼーゼーゼーゼー

アカメ「着いたぞ」

滝壺？「みたいなどころについた

タツミ「へえーっ綺麗な所だな」

アカメ「川の獲物を葬る」

服を脱ぎだす

タツミ「まさか全裸で・・・!?」

もちろん水着

アカメ「この水の中で動きやすい服で・・・狙いはコウガマグロ、ここはポイントだ」

タツミ「え・・・それって確か警戒心の強いレアな怪魚じゃ・・・」

バシヤ

ドバツ

タツミ「爆釣!？」

アカメ「川底に潜り気配を断ち、獲物が通りかかった瞬間に襲う思い切りの良さが重要だ、出来るか？」

タツミ「上等だ!!!」

服を脱ぎ捨て

ドボン

優菜「私ないわ、水着」

悠「俺も」

優菜「お前はパンツで行け」

結果2匹だった

悠「次は俺か」

優菜「これ使え」

銃を渡す

悠「これは！」

優菜「わかるよな？使い方」

こめかみに当てる

パアン

？「我は汝、汝は我。今ここに契約をかわさん」

悠「よろしく」

ウンディーネ「私はウンディーネ、よろしくお願いします」

悠「早速」

滝壺に渦ができる

優菜「ほお」

そしてマグロが打ち上げられた

悠「3匹か」

優菜「よし、私も・・・」

パアン

？「我は汝、汝は我」

優菜「はいよろしく」

アラメイ「私はアラメイ、これからよろしく頼むぞ」

優菜「じゃあ、お前も・・・」

ゴロゴロゴロ

タツミ「へ？」

ピシヤ

ドーン

悠「雷かよ」

プカー

悠「ウンディーネ、取り入ってくれ」

水がここまで運んできた

アカメ「よし、帰るぞ」

ナジエンダ「で、結局タツミが捕まえたのは2匹と・・・初めてにしては上出来じゃないか」

レオーネ「服脱ぎ捨てて上等！って言ったんだって？」

アカメ「まだまだ甘い」

優菜「クソツ、一番最後だったからか5匹しかいなかった」

悠「俺は3匹・・・特にいうことない」

ナジエンダ「レオーネ、数日前帝都で受けた依頼を話してくれ」

レオーネ「標的は帝都警備隊のオーガと油屋のガマルって奴だ、依頼人が言うには」

その日の事

女性「オーガはガマルから大量の賄賂を貰ってるんです」

レオーネ「続けて」

女性「ガマルが悪事を行うたびに代理の犯罪者がオーガによってでっち上げられるんです、私の婚約者も濡れ衣を着せられ死罪になりました。あの人は牢屋で二人の密談を聞き処刑前に手紙で私に知らせてくれたんです。・・どうか、どうかこの晴らせぬ恨みを・・・」

レオーネ「・・分かった、そいつら地獄に叩き落してやる!!」

女性「ありがとうございます!!ありがとうございます!!」

戻って

チャリン

レオーネ「これはその依頼金だ」

優菜「ずいぶん入ってるな」

タツミ「その人よくこんな貯めたな」

レオーネ「性病の匂いがした。・・体を売り続けて稼いだんだろ」

悠「嘘だろ。・・?」

タツミ「・・そんな」

ナジエンダ「事実確認は?」

レオーネ「有罪だ、油屋の屋根裏部屋にて断定できた」

ナジエンダ「……よし、ナイトレイドはこの依頼を受ける。悪逆無道のクズ共は新しい国にいらん、天罰を下してやろう」

レオーネ「ガマルを殺るのは容易だが、オーガはなかなか強敵だぞ」  
鬼のオーガ

鬼と呼ばれるだけあり……その剣の腕は犯罪者たちから恐怖の対象とされている、普段は多くの部下と見回りに出ており、それ以外は警備隊の詰め所で過ごす。賄賂は自室にガマルを呼んで受け取っている、非番の日は役目詰め所を離れるわけにもいかず、宮殿付近のメインストリートで飲んでいる

タツミ「実行は非番の時にしか無理そうだな」

ナジエンダ「……だが宮殿付近の警備は嚴重だ、指名手配中のアカメに頼むのは危険だな」

アカメ「メインたちが戻るのを待つのは？」

タツミ「でもアイツ等いつ仕事が終わるかわかんないんだろ？」

アカメ「うん」

タツミ「だったら、俺たちだけでやり遂げようぜ！」

ナジエンダ「ほう……お前がオーガを倒すというのか？」



タツミ「え？」

レオーネ「私も顔バレしてないが今の発言、責任は取ってほしいよなあ」

アカメ「今のお前には無理だ……」

タツミ「こうしてる間にもまた濡れ衣を着せられる人がいるかもしれないんだろ？  
だったら俺はやるよ、大切な人が理不尽に奪われる……そんな思いもう誰にもさせた  
くねえ……」

ナジエンダ「分かった……お前の決意くみ取ろう、オーガを消せ」

レオーネ「よく言ったタツミ！ 気持ちのいい覚悟だ！」

ナジエンダ「レオーネとアカメは油屋を頼む」

レオーネ「分かったよ」

ナジエンダ「優菜と悠も一緒にオーガを消してこい、多分大丈夫だろう」

タツミ「どうだアカメ！ 俺だって決める時は決めるんだ！」

アカメ「……きちんと任務を遂行し、報告を終えて初めて立派といえる。この時点  
でいい気になってるようでは死ぬぞ」

タツミ「なっ」

街へ

レオーネ「ここを真つすぐ行けばメインストリートだ」

タツミ「分かった」

レオーネ「……これはアカメの昔話なんだけどな」

タツミ「ん？」

レオーネ「アカメは子供の頃終い揃って帝国に買われたんだよ、まあ……貧乏な親が子供を売るのはよく聞く話だ、そして同じ境遇の子と一緒に暗殺者育成機関に入れられ殺しの教育を受けて……過酷な状況の中を生き延びてきた、そうして帝国の命ずるままに仕事をこなす。一人の暗殺者が完成した……だがアカメは任務をこなすごとに帝国の闇を感じ取り、当時標的だったボスに説得され帝国を離反、真に民を想う革命軍側についてたんだ。そうなるまで共に育った仲間はほとんど死んだらしい……何が言いたいかわかるかい？」

タツミ「殺しのプロとして素人の俺がぬるいつて言いたいんだろ？」

レオーネ「ま……今日のが成功したらお前にも分かるさ」

タツミ「おう！絶対成功してくるぜ！」

レオーネ「グッドキル！」

その後

オーガ「たっぷり尋問した後の酒はうめえや」

男「オーガ様！」

オーガ「あん？」

男「お勤めご苦労様です、先日はお世話になりました」

オーガ「おう、困ったことがあったらいつでも言ってこい」

タツミ「・・・あのう、オーガ様」

オーガ「あん？」

タツミ「ぜひお耳に入れたい話があるんですが・・・」

オーガ「なんだ・・・？言ってみろ」

タツミ「表ではちよつと・・・路地裏でお話しできませんか？」

オーガ「オラ、ここならいいだろ」

タツミ「お願いします!!俺たちを帝都警備隊に入れてください!!」

スライディング土下座ア

オーガ「ハア・・・」

悠「金を稼いで田舎に送らなきゃならないんです」

少し泣きながら

優菜「もう手持ちもなくって・・・このままじゃ飢え死にしています」

号泣で

オーガ「んな事だろうと思っただぜ、正義の手順を踏んでこいボケ！」

タツミ「……ですが、この不景気では倍率が高すぎます」

オーガ「仕方ねえだろお前が力不足ってこつたな」

全員剣を抜きオーガとタツミ斬りかかる

ドサツ

タツミ「……やった」

すぐに起きあがりこつちに来ていたので

優菜「邪魔すんな」

タツミ「え!？」

腕を切り落として

悠「イフリート」

イフリート「オラオラオラオラオラオラオラア！」

ドゴオ

優菜「最後任せた」

タツミ「おう！」

ザザザ

戻った

ナジエンダ「強敵の始末ご苦労だったな！見事だ！」

タツミ「おう！どーだアカメ！報告おえて任務終了、なんとか無傷でやり遂げたぜ、さあ俺を認めろ・・・」

バツ

上半身を脱がす

タツミ「なっ・・・なんだ！何すんだ！」

アカメ「皆抑えて！」

ナジエンダ「分かった」

レオーネ「お！なんだか面白そうだな」

悠「なんだこれ？」

優菜「知らね」

タツミ「え・・・何・・・この展開・・・これってまさか・・・！」

パンツ以外全部脱がせた

タツミ「いやあああああ!!」

アカメ「・・・よかった・・・強がつて傷を報告せずに毒で死んだ仲間を見たことがある、ダメーじがなくてなによりだ。初めの任務は自防率が高い・・・良く乗り越えた！」

タツミ「あ・・・ああ」

レオーネ「アカメはお前に死んでほしくないから厳しく当たってたんだよ」  
ナジエンダ「料理は仲間とのコミュニケーション、難しい狩りで暗殺を学ぶ……ど  
れもお前に取ってプラスな日々だと気づいていたか？」

タツミ「え……あ……そうなの？ごめんアカメ……俺……誤解してた」  
アカメ「いいさ、これからも生還してくれ……タツミ」

タツミ「ああ、これからもよろしくなアカメ！」

レオーネ「何も着ないで何をヨロシクするつもりなんだよ」

タツミ「お前らが脱がしたんだろうが！」

ナジエンダ「……よし、じゃあ次はマインの下について頑張ってみろ」

タツミ「えっ」

レオーネ「一難去ってまた一難だな」

タツミ「あ……あいつですかあー？」

優菜「こりや大変だわ」

## 第三話

タツミ「憧れてた帝都もこうして見回してみると、表情暗い人も多いな」

マイン「そりやこの不景気と恐怖政治じゃね」

悠「日中こうも堂々と歩いて平気なのか？」

マイン「え・・・だって、顔割れてんのあいつ等四人だけだし」

指名手配所を見る

優菜「上がアカメ、左からナジエンダ・・・一個飛ばしてシエーレか」

悠「一個飛ばして？」

タツミ「真ん中のやつ誰だ？」

マイン「ブラートよ」

タツミ「ええっ!？」

マイン「ナイトレイドに入ってイメチェンしたの」

タツミ「変わりすぎだろ!？」

優菜「この爽やかイケメンが、あの優しい不良みたいなのに・・・」

マイン「てことで堂々と歩けるあたし達はここで任務よ」

タツミ「・・・上等だ、その為に俺を連れて来たんだろ？」

マイン「よしっ！帝都の市街調査開始っ!!」

タツミ「何だかわかんないけどおうっ!!」

市街調査Ⅱ荷物持ちですね、はい分かってましたよ

マイン「ふーっ買った買った、やっぱ春はピンクの服が映えるわね」

悠「そうだね」

マイン「オフの時くらい羽を伸ばさないとね♪」

優菜「ソウダネ」

マイン「よしっ任務達成！」

タツミ「これただのシヨツピングじゃねえかあ!!!」

マイン「頭が高い」

パン

ピンタア

タツミ「おふう!？」

マイン「アタシが上でアンタ等が下！部下が口答えスナナ！荷物持ちになれただけで

もありがたいと思いなさい」

踏みつける



タツミ「グエツ」

悠「怒らせない様にしよう」

優菜「うん」

タツミ「上司たって一時的な上司じゃねえか！」

マイン「上司の力なめんな新人、例えば」

何かを書き出す

マイン「あんたをこのルーレットで他の漫画に飛ばすことも可能!!!」

嘘だろオオオ!?

マイン「あんたの好きな「はつきあい」もあるわよ」

優菜「いやそれより、それ挟んでるの「コープスパーティ」!？」

タツミ「そこ外した時恐すぎだろ!もつと萌え系マト広げてくれよ!!・・・つたく」

ざわざわ

なんだ?カイジか?

タツミ「なんの騒ぎだ・・・?」

マイン「帝国に逆らった人間の公開処刑でしょ、帝都ではよくあることよ」

何人か血だらけで張り付けられている

優菜「全員右腕がないな」

タツミ「な・・・なんて非道いことを・・・」

マイン「ああいう事を平気でやるのが大臣・・・世継ぎ争いで今の幼い皇帝を勝たせたキレ者よ、アタシは・・・あんな風にはならないわ、必ず生き延びて勝ち組になつてやる!!!」

優菜「可哀そうだ、こんな世の中で悶えながら死ぬよりは・・・」

悠「どうするつもりだ？」

優菜「来世にかけたほうが救いだな、アリエル指弾」

ピンピンピン

バシユバシユバシユ

ガクツ

気が消えた

優菜「ちゃんと天国に送つてやる、安らかに逝け」

その後

ナジエンダ「新しい依頼だお前達、標的は大臣の遠縁にあたる男イヲカル。大臣の名を利用し女性を拉致しては死ぬまで暴行を加えている、奴を警護しおこぼれに与る傭兵五人も同罪だ。重要な任務だ、全員で掛かれ!!」

またその後

優菜「さてそろそろか」

敵「なんとしても刺客に追いつけ！逃げられれば我々が大臣に殺されるぞ！！そう遠くへは行つてないはず・・・」

レオーネ「来た来た、さて今回は暴れちゃうぞ」

・・・

一瞬！

優菜「出る前に全部倒しちゃった」

レオーネ「あくスカツと爽やか♡」

シエーレ「なかなか強かったですね」

優菜「いや、気が一つ逃げてる」

レオーネ「何!？」

優菜「タツミ方へ行つてる・・・一応行つた方がよさそうか？」

アカメ「行こう」

行つたら・・・

マイン「何よせつかく認めてあげようと思つたのに！

タツミ「うるせえ！お前天才じゃないな！秀才止まりだ！」

マイン「ハア!?天才にに決まつてるでしょ！」

タツミ「だいたい天才は自分で天才って言わねーんだ！」

アカメ「……………」

レオーネ「駆けつけなくても大丈夫だったな」

次の日

ナジエンダ「今回の標的は帝都で噂の連続通り魔だ、深夜無差別に現れ首を切り取っていく。もう何十人殺されたかわからん」

タツミ「その中の3割は警備隊員なんだろう？強えな」

ラバック「間違いなくあの首斬りザンクだろうね」

タツミ「なんだソレ？」

マイン「知らないの？ほんとト田舎に住んでたのね」

シエーレ「スミマセン、私も分かりません」

マイン「シエーレは忘れてるだけだと思っわ」

タツミ「首斬りザンク、元は帝国最大の監獄で働く首斬り役人だったそうよ」

悠「大臣のせいで処刑する人数が多くて毎日毎日繰り返し繰り返し命乞いする人間の首を切り落としていたんだと」

優菜「何年も続けてるうちにもう首を斬るのが癖になってしまったそうよ」

タツミ「そりゃおかしくもなるわな……………」

マイン「で監獄で斬ってるだけじゃ物足りなくて辻斬りに、討伐隊が組織された直後に姿を消しちまったんだが・・・まさか帝都に出てくるとはな」

タツミ「危険な奴だな、探し出して倒そうぜ!!」

ブラート「まあ待てタツミ」

タツミ「・・・兄貴?」

ブラート「ザンクは獄長の持つてた帝具を盗み、辻斬りになったんだ。二人一組で行動しねえと・・・お前危ないぜ」

優菜「そういや帝具ってみんなの以外ここに残りはねえのか?」

アカメ「今はない、それに合ってなかったら本部に送る」

タツミ「合ってない?」

ブラート「帝具は人を選ぶんだ、最初にどう思ったかとかかな?カッコいいと思ったら使える、逆にかっこ悪いと思ったら拒絶反応を起こすぞ」

アカメ「私達は殺し屋チームだが帝具集めもサブミッションとして存在する」

優菜「タツミは何かカッコいい!とか強そう!とか思ったやつないか?」

タツミ「・・・兄貴のインクルシオはカッケえと思った」

優菜「・・・ブラート、インクルシオ一回貸して」

ブラート「別に構わねえが」

貸してもらった

優菜「ガイア、出来るか？」

ガイア「人間は面白い物を作りますね、出来ますよ簡単です。言ってもコピーですか  
ら」

優菜「作ってくれ」

ポン

ブラート「そいつは・・・！」

ナジエンダ「インクルシオか・・・」

優菜「ほい、タツミつけてみる」

タツミ「ああ・・・インクルシオ!!」

ゴウ

ギユアアアア

ギン

タツミ「お、おおー！使えた!!インクルシオが使えたぞ!!!」

ナジエンダ「帝具のコピーか・・・凄いな、使える」

優菜「戦力UPってことで」

夜にしばらくすると

優菜「タツミ気が小さくなった！近くに大きな気もある、ザンクだろう」  
悠「なら行こう」

着くと

ザンク「その刀……かすり傷も許されないってのはズルいねえ……」  
アカメ「私も動きや心を見られている……お互い様だ」

優菜「なんだ、もう決着か」

ザンク「また仲間か、それじゃあ」

アカメ「!!避ける!!」

ガキイイイン

ザンク「……お前も強いんだな、避けようとしていなかった」

優菜「ガードしなくても、お前くらい秒で倒せる」

ザンク「本音のようだな、よしならば死ね！」

!!!

蓮？

今度は竜司……杏……双葉……母さん……父さん……悠

入れ替わりながら何度も現れる

タツミ「どうしたんだオイ！優菜!!」

ザンク「幻視、その者にとって一番大切な者が目の前に浮かび上がる」

タツミ「優菜!! 見えているのは幻だ! 騙されるな!」

ザンク「無駄だ、一人にしか効かぬが催眠効果は絶大、そして・・・どんな手練れの者であろうと最愛の者を手にかけることなど不可能、愛しきものの幻影を見ながら死ぬ!」

優菜「確かに斬りにくいな、だが」

ザンク

優菜「意味なんてねえ」

ザンク「コイツ・・・容赦なく・・・何故だ!! 一番愛する者が視えたはずだ!!!」

優菜「知らんね、何人も現れやがって気持ちわりい。お前が死ぬ」

さつき見た通りなら心を読まれるんだらうなら単純に行こう

ザンク

ザンク「一瞬で・・・」

優菜「じゃあな」

ドサツ

ザンク「音が・・・止んだ・・・」

優菜「これはもらって行くぞ」



帝具を取る

優菜「向こうに行ったらしつかり謝って来い」

ガクツ

優菜「おっと」

少し無茶したか

一瞬だけ3になったが、まだちよつと厳しいな  
だけどこれができれば・・・まあその話は後だな

次の日

次はシェーレらしく

今は

悠「死ぬうううううう」ブクブクブク

優菜「おい!!しつかりしろ!!」

タツミ「・・・」

優菜「き・・・気絶してる・・・」

パシン

タツミ「はっ!!!」

優菜「あともう少しだ頑張れ!」

鎧泳ぎやべえ

ついた

ゼーゼーゼーゼー

シエーレ「鎧泳ぎお疲れさまでした」

悠「重いいいい」

優菜「手え貸してやる」

悠「ああ」

グツ

ガシヤン

悠「ゼーゼーゼーゼー」

タツミ「重え・・・ハードだぜ」

シエーレ「暗殺者養成カリキュラムに記された鍛錬法です、私はアジトでは役割とありませんので集中して鍛えられます」

タツミ「・・・なんで役割ないの？」

シエーレ「料理は焦がしてアカメをクールに怒らせました、掃除は散らかってブライトを困らせてしまいました、買い出しは塩と砂糖を間違えてレオーネに笑われました、洗濯は・・・うっかりマイン本人も一緒に洗ってしまいました」

タツミ「なんていうかドンマイ『最後のは良くやった』」

悠「そういえばシエーレ、俺たちと皆が会った時帰還メンバーにいなかったよね」

シエーレ「えー何か理由があつた気もしますが忘れました」

優菜「ソウデスカ」

シエーレ「こんなんですいませんせ」

ポロリ

眼鏡落ちた

シエーレ「あつ！眼鏡眼鏡・・・」

タツミ「シエーレはなんでこの稼業に？」

シエーレ「・・・遡つて説明しますと・・・私は帝都の下町で育ちました。幼い頃から何をやってもドジばかりで、私には一つとして誇れるものがありませんでした「アイツはどこか頭のネジが外れてる」そんな風によくからかわれていました・・・ですが、そんな私にも仲良くしてくれる友達がいたんです。私がこんなにドジをしても、彼女がは決して私の事をバカにはしませんでした。彼女という時間だけが私にとつて唯一の幸福でした。その日までは・・・彼女の家で遊んでいると男が殴りこんできました。友達の元彼氏でふられたことを逆恨みして家で暴れ始めたんです。そして・・・とうとう私の目の前で彼女の首を絞め始めました。男は麻薬でおかしくなつて、私は・・・彼

女を助けなきやと思いました。驚くほど冷静でした。刃物を持ってきて隙だらけの男の首筋……急所に差し込みました。男はあっけなく死にました……彼女はその様に震えていましたが、逆に私の頭はクリアでした。正当防衛として片がつきましたが、私が彼女と会うことは二度とありませんでした。そして後日……道を歩いていると男達胃がいきなり襲いかかってきました。殺された仲間の復讐だと、どうやら男はギャングの下つ端だったようです。「お前の親はさつき殺しておいた……次はお前だ」と四人は猛りきつていました。そんなことを言われたのに私は、驚くほど平常心でした。男の単純な一撃をかわしに、護身用のナイフで急所を刺す。その男を盾に他の男たちも次々と殺していききました。男たちを全員殺した時……私は確信したんです。ネジが外れていくからこそ、殺しの才能がある。社会のゴミが掃除できる。役に立てることが一つある……と、以後帝都で暗殺をやっていたところを革命軍にスカウトされました」

優菜「そこで暗殺者養成カリキュラムか」

シエーレ「ハイ、私は貴方達ほど即戦力ではなかったですから」

数日後

ナジエンダ「悠、優菜……そろそろ傷も癒えてきただろ、ザンクから奪取したこの帝具……二人のどちらかつけられるならつけてみる」

悠「他の皆はいいのか？」

ブライト「帝具は一人一つだ」

ラバツク「体力、精神力の摩耗が半端ないからね」

悠『能力は良いんだが外見がなあ・・度胸いるよな』

優菜『いつもカオスの所に入れておけば目立たないな、見た目は悪くない。第三の目っほくて・・・厨二病言うな』

まず悠がつけた

ナジエンダ「文献に載っていなかった帝具だから謎が多いが・・」

アカメ「心を覗ける能力があったろう、私を見てみる」

悠「夜は・・肉が食いたいと思っている」

アカメ「完璧だな」

レオーネ「いやまだ能力発動してないだろ」

マイン「心の覗かれるなんて嫌よ、五視あるならもつと別の能力試しなさいよ」

悠『俺が視たいのは・・よく聞くのは透視だな、あるなら出る!』

カツ

マイン「どう?」

悠「ブツ」

ブツ?

\*悠は皆の下着姿を見て興奮して鼻血が出ています

タツミ「え？鼻血!？」

ラバツク「拒絶反応か!？」

優菜「いや、なんか違う気が・・・」

ブシュ

タツミ「今度は頭!？」

ラバツク「今度は拒絶反応だよな！」

アカメ「急いで外そう」

ナジエンダ「相性だ・・・お前には合わなかったのさ」

優菜「いや、こいつ安らかな表情で気絶してやがる」

タツミ「なんでだよ！」

優菜「じゃあ次は私か」

付ける

頼むぞ

まずは洞視はやったから・・・遠視

おおく遠くが見える

じゃ次は未来視

悠が起きる

悠「はっ!!」

レオーネ「あつ起きた」

幻視、タツミにしよう

タツミ「サヨになった!」

最後に透視

皆の下着が見える

あつコレで悠が・・・

ナジエンダ「大丈夫みたいだな、ならその帝具はお前のものだ。あとこの帝具に関する文献を読んでおくといい」

三人でのぞき込む

悠「たくさんあるな」

優菜「これで一部?」

ナジエンダ「そこに載ってる帝具だけでも頭に入れておけ」

タツミ「ところで一番強い帝具ってなんだ?」

ナジエンダ「・・・用途と相性で変わるさ・・・だがあえて言うなら・・・氷を操る帝具・・・だと私は思う。幸い使い手は北方異民族の征伐に行ってるがな」

ナバツク「北の異民族は強いからね、ホラ北の勇者つているじゃん」

タツミ「あ、それは俺でも知ってる」

優菜「北の勇者ヌマ・セイカ北方異民族の王子、槍を持っては全戦全勝。凄まじい軍略を併せ持ち民の絶大な信頼を受ける正に帝国の脅威。彼の精強な軍隊は自国の要塞都市を拠点とし、帝国への侵略を強めていた。故に帝国は侵略に対抗すべく北方征伐部隊を組織した・・・だよな確か」

ラバツク「心配いりませんっていくらあの女でも征伐に一年はかかりますって」

ナジエンダ「・・・そうだな・・・」

タツミ「フツフツフツ強敵上等！どんどん帝具も集めようぜ！」

レオーネ「やけにゴキゲンだな、いきなりどーした」

タツミ「いや？なんでもねーよ」

優菜「そろそろ寝よう」

悠「だな」

優菜「それじゃ、お先に」

次の日

女性「こんにちはレオーネ」

老人「今度肩もんどくれよ」



青年「今日もエロイな！今夜飲もーぜ！」

少年「レオーネ遊んでよーっ」

タツミ「他と違ってスラムは生き生きしてんだな」

レオーネ「雑草魂だね、生まれたときから酷い貧乏ならたくましくもなる」

悠「にしても姐さん凄い人気だな」

レオーネ「私の生まれ育った場所だからなホームだホーム！これでもマツサージ屋として腕がいいと評判・・・」

小太りの男「いたぞっレオーネだ!!溜まったツケを払ってくれ！」

893 風な男「博打で負けた金清算しろ」

893 風な男2「兄貴からちよろまかした金返せゴルア!!!」

逃げながら

レオーネ「どーだ、面白いところだろ？」

優菜「姐さんそのうち標的にされるよ!？」

逃げ切った

タツミ「ここまで来ればまいたる、なあ姐さ・・・ってアレ？」

優菜「姐さんどこ行つた？」

？「ややっ私の正義センサーに反応アリ！そこな君等！何かお困りですかな？」

タツミ「その服は・・・」

セリユー「帝都警備隊セリユー、正義の味方です！」

犬？「キュウウン、キュウーン」

優菜『ギャワイイ!!!』

セリユー「コロちゃんお腹すいたの？ガマンしてね！」

悠「ソイツ・・・犬か？」

セリユー「帝具ヘカトンケイル、ご心配なく悪以外には無害ですから」

優菜「コロちゃんの方が呼びやすいな」

セリユー「ところで何を困ってたんですか？」

タツミ「あ：いや、道に迷ってしまったって、元いた酒場の名前は分かるんですが・・・」

セリユー「それは大変！パトロールがてらお送りしますよ。こっちは、はぐれない

てくださいね！」

タツミの手を引く

コロ「キュウ！キュウ！」

優菜「あつ嫉妬してんなコイツ」

タツミ「帝都警備隊は全員この生き物を飼ってるんですか？」

セリユー「まさか、帝具持つてるのは私だけです。コロちゃん・・・あ・・・私がつ

けた名前なんですけど・・この子は相性が良くない使い手だと動こうともしないらしいんです。上層部には使える人間がいなくて、私達ヒラまで適性検査を受けてまして、その時私の正義の心にこの子が応じてくれたんです。だから今では私の相棒なんですよ。ね、コロちゃん」

コロ「キューツ♡」

タツミ「へ・へえーっ」

セリユー「ではお店はこちらになりますので」

優菜「ありがとうございます」

セリユー「なんの！悪を見つけたらご一報ください、私達が消滅させに行きますので！」

タツミ「アハハそれは心強いです」

セリユー「行くよコロちゃんお腹すいたでしょ、死刑囚5人でどうですか？」

コロ「キュー♡」

行つた

優菜「報告だな」

タツミ「ああ」

その夜

色街の屋根の上

タツミ「ここが帝都の色街か・・・ドキドキするな」

レオーネ「そのストレートな反応可愛いねえ、さーてお仕事して借金返さないと！変身！ライオネル！」

獣耳が生えて髪が伸び手全体に毛が生えた

レオーネ「よしっこの格好になると昂ぶる昂ぶる！さ、潜入して殺すよお前ら」

タツミを担ぐ

優菜「悠は私ごと」

ドウン

超サイヤ人ー

オーラは消す

屋根裏まで来た

レオーネ「ふいーっ到着！」

タツミ「これ潜入って言うのか？」

レオーネ「こつちこつち早く来いよ！」

のぞき込む

下は乱れに乱れた女達が

優菜「この匂いは・・・薬か」

タツミ「うゝっ」

男がやって来た

親分「おーやつてるやつてる、お前達ちゃんと働けばもつと薬回してやるからな！」

女達「ハアーイ♡」

子分「ん？親分・・・コイツ見てくださいよ」

一人倒れている

親分「あーダメだなコリヤ、魚くせえし壊れてるわ」

女「ああ・・・もつと薬をおおっ」

親分「廃棄処分、新しいのと入れ替えろ」

子分が女を殴った

子分「またスラムのアホ女達に声かけましようよ」

親分「おう、あそこのろくでなし共は金の為なら何でもするからな」

悠「依頼通りのヒデエ奴らだな・・・許せねえ！」

レオーネ「今殴られた子・・・スラムの顔馴染みだ・・・ムカツク・・・さつさと標的

始末しよう！」

タツミ「了解・・・オレもシエーレの話で麻薬関係には腹立ってたんだ・・・」

優菜「奴らが集った所を叩こう」

居間

子分「親分・・・そろそろ葉の販売ルートも拡張しましょうよ！」

親分「そうだな・・・チブル様の所へ相談に行ってみるか」

ゴガア

優菜「お前達が行くところは」

タツミ「地獄だろ!!」

優菜「先行くぞ」

周りのやつを全員悠たちに任せて子分の前に行く

子分「なっ・・・!ざ・・・ざけんな!!」

パンパンパン

優菜「・・・この中村優菜は・・・いわゆる不良のレッテルをはられてる。ケンカ相手を必要以上にぶちのめし、今だ病院から出てこない奴もいる。威張るだけで能無しなんで気合を入れた奴は二度と来ることはなかった、料金以下のマズい飯を食わせるレストランには、代金を払わねーなんてのはしょっちゅうよ!だが、こんな私にも吐き気のあるような悪は分かる!!悪とは、てめー自身の為だけに弱者を利用し踏みつける奴の事だ!!ましてや女を!!おめーのやることは被害者にはわからねえし表ざたにはならね

え・・・だから、私達が裁く!!」

親分「悪だと？悪とは敗者の事、正義は勝利の事、勝ち残った者の事だ、家庭は問題じゃない敗けた奴が悪なんだよ!!」

優菜「この世で一番悪い奴は、自分が悪だと気づいていない最もドス黒い悪だ。お前達の裏にいるのはそういうやつだ、違うか？」

子分「黙れえ!!」

手で受け止め

ベジツトソードで斬った

親分「な、何が欲しい！金か！薬か！ほしけりやくれてやる！助けてくれ!!」

優菜「二度とこんなことはしないと約束するなら、私達は手を引く」

タツミ「何を考えているんだ！優菜!!」

親分「わかった・・・二度としねえ、だからたす・・・」

パパパン

親分「え・・・？」

優菜「さつき撃つておいた弾の時間を衝撃を遅らせておいた、イエスと言おうがノーと言おうが殺すためにな」

親分「二度としなかつたら、もう手を引くつて・・・さつき・・・」





レオーネ「スラムに元医者の子いさんが居るんだが……これがまだまだ腕がいい、事情を話して診てもらうさ。若い女の子大好きだから喜ぶだろ」

タツミ「姐さん……」

レオーネ「助かる可能性があるに越したことはないからな……」

タツミ「……へっなんだかんだで優しいじゃん」

レオーネ「私の顔馴染みがいたからだよ」

タツミ「どんな理由だっていいよ、そこに少しでも希望があるなら」

レオーネ「……タツミ、前から思ってたけど」

ペロ

レオーネ「お前のそういう顔……可愛いなあ……」

耳舐めた！

タツミ「な……なっ……！」

レオーネ「ふふ……文字通りおねーさんが唾つけておいたんだ」

優菜「へい、顔赤くしてる！」

悠「へいへい、デレてるデレてる!!」

レオーネ「いい男に育てばおねーさんのものだ……さて、別動隊の皆も無事かな

？」

ヘル『ヤバい！こっち来て!!』

向こうに行かせてたヘルから・・!?

優菜「どうした？」

ヘル『シエーレが!!!』

悠「カオス!!」

タツミ「どうしたんだ!？」

優菜「行ってくる」

レオーネ「まて」

グオン

シエーレの胴体が・・・!

優菜「クロノス!!」

ドオオオオオオン

コイツは・・・ヘカトンケイルか、ということはセリユーカー

とりあえず、こいつの口開いて

シエーレの上半身を出す・・・

下半身とくつつける

そして時は動き出す

シエーレ「え？」

マイン「シエーレ！」

シエーレ「私は今確かに・・・」

セリユー「なんで！どうして生きてるんだ！」

優菜「よお」

マイン「あんたは！」

セリユー「お前は昼間の！！お前もナイトレイドだったのか！！」

兵士「あれだっ！交戦してるぞ！！応援をもっと呼べえ！！」

優菜「お前達は逃げてくれ、あとは任せろ」

シエーレ「ですが！」

優菜「ですがじゃない！死にたいのか！！」

悠「俺達は死にやしないさ」

兵士「うおおお！！」

ドガ

肘でみぞおちを突く

兵士「ガハッ」

ガクッ

優菜「任せろ」

グオン

セリユー「逃がさない!!!」

ドガガガガ

口から機関銃かよ

キンキンキンキン

全部弾く

優菜「もし、帰れたら・・・また一緒に飯食って馬鹿笑いしようや」

シエーレ「優菜さん・・・」

ガオン

セリユー「せめてお前達だけでも!!」

優菜「お前・・・両腕がないじゃないか・・・そこまでしてなんで」

セリユー「正義のためですよ!!お前達倒すために!!師匠の仇を返すために!!!」

優菜「・・・歪んでる、お前からしたら私達は悪かもしれねえが・・・お前は正義な  
んかで動いてねええ・・・私情の恨みでしか動けねええ奴に!!正義を名乗る資格はねえ  
!!!」

セリユー「悪に言われたくないですねえ!!コロちゃん!!!」

コロ「ガアアアア!!!」

悠「イフリート!!」

イフリート「オラオラオラオラオラオラ」

コロ「ごっ!」

イフリート「オラア!!!」

悠「ボラーレヴィーア!」

セリユー「そんな!コロちゃん!!」

兵士「皆進めー!!」

避けて殴ってセリユーの弾幕をかわしながらやりあつてると

コロ「ガアアアア」

ダブルラリアット!!?

ドガア

兵士「捕らえろ!!」

ピカーッ

神様「潮時じゃの」

優菜「なんだ?この話は終わりなのか?」

神様「終わりじゃ連れて行くぞ」

兵士「撃てーッ」

パアン

兵士「当たらない!？」

神様「行くぞ」

ピカーッ

兵士「グッ」

光が消える

兵士「!? 奴らはどこに!？」

セリユー「クソーッ!!!!」

? 「クツクツク、奴らは元の世界に帰ったか・・・」

? 「この世界から連れて行くのは、ナイトレイドだけだぞ。分かっているな? あの方

からもらったのは少ししかないからな」

? 「分かっている、行くぞ」

ドギューン